

己は随分旅行好きで、京都、仙台、北海道から九州までも歩いて来た。けれども未だこの東京の町の中に、人形町で生れて二十年来永住している東京の町の中に、一度も足を踏み入れた事のないと云う通りが、きっとあるに違いない。いや、思ったより沢山あるに違いない。

そうして大都会の下町に、蜂の巣の如く交錯している大小無数の街路のうち、私が通った事のある所と、ない所では、孰方が多いかちよいと判らなくなって来た。

何でも十一二歳の頃であつたらう。父と一緒に深川の八幡様へ行った時、

「これから渡しを渡つて、冬木の米市で名代のそばを御馳走してやるかな。」

こう云つて、父は私を境内の社殿の後の方へ連れて行った事がある。其処には小網町や小舟町辺の掘割と全く趣の違った、幅の狭い、岸の低い、水の一杯にふくれ上っている川が、細かく建て込んでいる兩岸の家々の、軒と軒とを押し分けるように、どんよりと物憂く流れていた。小さな渡し船は、川幅よりも長そうな荷足りや伝馬が、幾艘も縦に列んでいる間を縫いながら、二た竿三竿ばかりちよろちよろと水底を衝いて往復していた。

私はその時まで、たびたび八幡様へお参りをしたが、未だ嘗て境内の裏手がどんなになつてゐるか考へて見たことはなかつた。いつも正面の鳥居の方から社殿を拝むだけで、恐らくパノラマの絵のように、表ばかりで裏のない、行き止まりの景色のように自然と考へていたのである。現在眼の前にこんな川や渡し場が見えて、その先に広い地面が果てしもなく続いている謎のような光景を見ると、何となく京都や大阪よりももつと東京をかけ離れた、夢の中で屢々出逢ふことのある世界の如く思われた。

それから私は、浅草の観音堂の真うしろにはどんな町があつたか想像して見たが、仲店の通りから宏大な朱塗りのお堂の麓を望んだ時の有様ばかりが明瞭に描かれ、その外の点ほとんど頭に浮かばなかつた。だんだん大人になつて、世間が広くなるに随い、知人の家を訪

ねたり、花見遊山ゆさんに出かけたり、東京市中は隈くまなく歩いたようであるが、いまだに子供の
時分経験したような不思議な別世界へ、ハタリと行き逢うことがたびたびあった。